



子どもの本から

五歳の少女が語るラップランドの物語

美谷島いく子

北欧児童文学には、しばしば、ラップランド人が、不思議な登場人物として出てくる。例えば、ノルウェーのドーレア夫妻著の絵本『オーラのたび』（一九三二）では、男の子オーラは、行商人に連れられて北へくくと旅を続け、ラップ人と出会う。スウェーデンのエルサ・ベスコフ作の絵本『ウツレと冬の森』（一九八一）では、スキーをはき森へ出かけた少年

ウツレは、冬王様の城でラップランドの小さな老人と子ども達が、クリスマスの贈物のスキー、スケート、橇を製作したり、編物や刺繍をしているのに出会う。フィンランドのサカリアス・トペリウス作の『星のひとみ』（一八六五）の主人公、瞳に星の光を宿し、すべてを見抜いてしまう女の子もラップランド人である。しかし、ラップランド人については、どんな生活を

しているのかわからず不思議のベールに包まれていた。

私は、そんな折、ラップランドに住むサーメ人（サーメ語を話す人々）の生活を、内側から描いた、この大型絵本『ゆきとトナカイのうた』に出会った。『リーベとおばあちゃん』『森からのプレゼント』の作品で知られる、ノルウェーの代表的作家ヨー・テン・フィヨールのノルウェー語が原典となったという。

ラップランドは、スカンジナビア半島の北からロシアのコラ半島にかけて広がる地方の呼び名で、ラップとは、サーメ語で「北の端」の意味という。ここに住むサーメ人は、総数約八万人の欧州で最古の少数民族である。北欧ゲルマン系の北欧人とは、人種も言語も違い、シベリアの方から西へ西へと移動してきたサモエド人（モンゴル系の人々）ではないかと言われ、独特の言語（サーメ語）と自然への畏敬の念と祈りの文化を持つ。戦前まで、文化融合政策がとられた為、サーメ人の言語や文化は弱体化した。この絵本は、貴

ゆきとトナカイのうた

ボディル・ハグブリンク 作・絵 山内清子 訳

ハグブリンク

ゆきとトナカイのうた

ベネッセ



11894・8288・4930-0 08798 9182061 定価1880円（本体1540円）

▲『ゆきとトナカイのうた』ボディル・ハグブリンク作・絵
山内清子訳 ベネッセコーポレーション 1990年

重なサーメの自然、風土、文化を、世界中の読者に伝える国際的絵本の傑作であり、幼児の多文化教育にも適した絵本である。

表紙の左下から、右手にストック、左手に犬の首紐を持ち、読者の方に向って滑ってくる白い民族衣装の少女が、この物語の主人公マリット・インガである。

スキーは、サーメ人がトナカイを追いかけて素早く移動する中で生まれた物で、四千五百年前の世界最古のスキーの壁画が残っているという。

この絵本の一番の魅力は、五歳の少女マリットの瑞々しい目、耳等五感を通して、サーメ人の素朴な生活が語られてゆく点である。

この絵本の扉は、晩夏の虹の高原に響き渡る「ホーホー ホーホー、ブルルーン、ワンワン」という音によって開かれる。トナカイを囲いの中に追い込む、マツチスおじさんの声と、父さんのオートバイの音と、犬の声。ラップランドの大自然の中での放牧生活を描くこの絵本の風景からは、マリットの耳がとら

えた様々な音が聞えてくる。

彼等は、苔を求めてトナカイを育てながら、蒲鉾型テントをはじめ、何でも自分で作り出さねばいけない。マリットはトナカイの印づけやトナカイや白樺から、プリミティブな物が形を成してゆく過程に、目を奪われて見つめている。

例えば、十二月になり、トナカイ一匹を殺すと、肉はもちろん、皮や内蔵、骨の髓まで捨てる所なく利用する。父さんは、臍すなの皮から靴を作り、母さんは、毛皮からズボンやタイツを、臄よは縫って、靴用の糸を作る。又、腸を洗い、レバーや血を詰めて、中味により違う名前のソーセージを作る。「冬のおうち」で一緒に住む祖母さんは、脳みそでパンケーキを焼いてくれる。

白樺からは、蒲鉾型テントの骨組みや、物置き台や薪を作る。祖父さんは、白樺の木をくり抜いて、人形の揺り籠「コムセ」を作ってくれる。マリットも、白樺の木で、トナカイの皮の裏打をしたり、白樺の皮

で、トナカイの皮の裏を擦り皮鞣なめしを手伝いながら、自分達で作り出してゆく生活をじっとみつめている。そうすることにより、厳しい自然の中で、自然を征服するのでなく、自然を友として暮らしてきたサーメ人の生活の基本的な知恵を学んでゆく。

トナカイはサーメ人にとって、単なる家畜ではなく特別の物である。驚くことには、子どもも誕生日のたびにトナカイをもらうので、マリットも年の数だけトナカイを所有しており、自分のトナカイ「シロ」や子犬のモステヤブチの成長を、心弾ませて見守っている。しかし、彼女は、作る、生まれる、育つという、すすくと、伸びやかな生活の中で、雪が早く降り融けた水が苔に凍りつくと、トナカイが全滅すること等、自然に対する畏れも知りながら育つ。

マリットは、星やオーロラを遊び友達のように親しくとらえ、時の巡りを、自然の移ろいや、陽差しの変化によって感じている。感動的なのは、ずっと心待ちにしていた初めての太陽が登る時、絵本の題名にもなっ

ている、「おひさまと雪とトナカイのうた」を犬のブチに歌って聞かせ喜ぶ、最後の場面である。極北の厳しい大自然の中での生活を描いたこの絵本は、幼児が生きることの基本とは何かを考えさせてくれる。

又、誰もいない広大な高原にトナカイの大群を追って移動するスピード感と、テント内の火を囲む濃密な空間での安定感との対比が、この絵本をめり張りのある楽しいものになっている。

この絵本の大部分は、現実には、陽光が差さない、厳寒の暗い世界のことである。しかし、白雪の中の、鮮かな赤青黄の民族衣装コップ、皆が教会に集ったクリスマス等、冬の方が明るく彩られていることに気づく。幼いマリットの心に映った幼年時代は、雪明りやランプの光の中で、家族に守られ安心した、明るくキラキラと光り輝いている世界として形象化されている。ラップランドの風と光の中で、健康な楽天性に満ちている。それは、自然から遠ざかってしまった私達が、失ってしまった輝きでもある。

(舞々同人)